高山

高山（たかやま）の原生林を守る会
会報　第 130 号
2024年　9月

第 194 回観察会　高山・亜高山針葉樹林の植物観察会

高山の原生林を守る会・第 194 回観察会を実施しました。参加者は 12 名でした。心配された天気もまずまずで、涼しさを感じるぐらいでした。

今回は YAMAP を通じて参加された方もいて、メモしながら熱心に説明を聞いてくれるのでこちらも思わず熱が入ってしまいました。

鳥子平のツルコケモモの花は既にほとんどが散ってしまいましたが、それでもミヤマリンドウやコバノトンボソウなどは下見の時よりも花が増え、ミカヅキグサの白い花が見頃になっていました。

オオシラビソ林では、コメツガ、ネコシデ、ダケカンバなどの木々やオオバショリマ、ヤマソテツ、ツルツゲ、カニコウモリ、ミドリユキザサなどの林床植物をゆっくりと観察しながら山頂を目指しました。

山頂では幹事のオカリナ演奏に耳を傾けながら昼食。麦平側の登山道でシラビソを観察し、下山しました。

途中の滑りやすい所ではロープを設置しながら、慎重に下り、無事に鳥子平まで。しばらく鳥子平の植物やミズゴケを観察し、スカイラインへ。

スカイラインでは外来植物とミヤマウツボグサ、メイゲツソウなどの自生植物の花を観察して観察会を終了しました。

鳥子平湿原

浮島にツルコケモモ

何を観察しているのかな

高山　第 194 回自然観察会に参加して

丹治　友子

7 月 21 日に第 194 回自然観察会に初めて参加しました。一切経山や鎌沼には行っても車窓から見るだけで行ったことがない高山。針葉樹林帯で反射板があり、頂上に登れると言うのでどんな景色が見られるのか楽しみでした。12 名の参加者でした。

標高 1606mの登山口(頂上は 1805m)から少し歩くと、すぐに鳥子平湿地帯。美しい池塘が待っていました。モウセンゴケの群落、ピンク色のツルコケモモ、ブルーのミヤマリンドウ、黄緑のコバノトンボソウ、チングルマも少しでしたが綿毛をのばしてたたずんでいました。市内は 35℃の酷暑ですが、ここはやはり涼しかったです。歩きはゆっくりマイペースでね、ということでしたが、先頭の代表は先を急いで足場を確認し所々で立ち止まり、説明はゆっくり丁寧に 1 つ 1 つの植物の説明をしていただきました。

シダも一見同じく見えますが、ヤマソテツ(2 種の葉)とオオバショリマがあると葉の裏側を持って説明いただく。ツルツゲの白い小花、ミドリユキザサの実をつけた群落。登山道ではカニコウモリ、ベニバナイチヤクソウ、ハリブキ、ゴヨウイチゴ、ゴゼンタチバナ、マイヅルソウの実、ツクバネソウ、ミツバオウレン等 7～9 種類の高山植物が登山道両脇で楽しませてくれた。ガクが白い花びらに見えるゴゼンタチバナ。葉が 6 枚の時花をつける。ルーペで見ると小さな花がたくさんついている。

樹林帯に入ると、オオシラビソとコメツガの 2 種があると教わる。大シラビソは幹の模様が横縞で葉の枝が見えないほどビッシリ葉がついていてコメツガは、葉が小さく幹は縦しま模様と、なんとか識別できた。

亜高山針葉樹林のぽっかり空いた空間にはパイオニア樹木と言われる、ダケカンバ、ナナカマド、ミネカエデ、テツカエデ、オカメノキ、ネコシデ(枝がサロメチールの匂いがする)等、亜高木層の樹木が生えるそうだ。振り返ると一切経山の噴煙が上がる景色が見えた。

頂上付近になるとコメツガの古木が蛇かタコのようにうねって枝をひねらせている。その下にはスギコケが植生しており、ルーペを覗いて種類を調べる。同じ様に見える苔でも種類が違ってそれぞれ名前がある事を知る。三角点に触れ、頂上へ。きれいに塗装されたテレビの反射板が2基立っていた。今は使用されてないと言うことだった。これが下から見えた鉄塔か、初めて登頂したと感激した。下界は雲の合間から、福島市内が見え、西は東吾妻山を眺めながら、また渡辺さんの雅なオカリナ演奏を聴きながら、トンボの大群が飛ぶなかで昼食をとった。その後幕川温泉側へちょっと下ったところでシラビソを観察。葉の上から枝が見え、葉先が直線とオオシラビソとの違い説明受ける。

反射板前のイワオトギリが咲いている場所で記念写真を撮り下山となった。下山途中、滑る場所が何カ所かあり、ロープを木に結びつけ、安全に歩けるように配慮してくださった。先輩方も足下をストックで草を分けて見えるようにして歩くと良いと声をかけ教えていただき、大変勉強になりました。亜高山針葉樹林の植物を観察し樹木の名前や種類を知り、高山の豊富な植物との出会い、楽しさを体験することができました。皆さんありがとうございました。

ここに生える草本は何種類

コメツガの葉は

異形のコメツガ古木

山頂で昼食、BGM はオカリナ

山頂から東吾妻

下りは滑ります

私の山の登り方2　25 年前の大作山

松井さき子

　去年の高山の会の総会で今年の観察会の場所（山）に私が提案した大作山に決定した。担当になっていた渡辺さんと下見の下見で大作山に。南東登山口から登り始め、最初の分岐に着くと、すべての斜面の雑木が伐採されていた。大木のスギやマツの木は残されていたが、マンサクやキブシ等の花芽がついた枝が山積みに置かれ、頂上まで伐採されていた。木を切るためであろうか、ところどころに新しく道が作られており、ぬかるんで土手が崩れていた。大小の石がゴロゴロして歩きにくく、その上、本当の登山道が分かりにくくなっていた。二人でこれでは観察会は出来ないのではないかと話し、伐採し山積みにされていた木々の写真を撮り、代表に報告、幹事の皆様に検討していただき、春の観察会の場所が変更になった。

斜面の雑木が伐採されていた

マンサクやキブシ等の花芽がついた枝が山積み

大小の石がゴロゴロして歩きにくく、登山道が分からない

　私がこの大作山に初めて登るきっかけになったのは、25 年前位になる。他の山に登るための足慣らしになるからと友人に勧められ、案内してもらった。短時間で登り、下りてこられ、色々なコースがあり、沢山の花にも出会える。春には山菜が取れ、楽しく、また、トレーニングにもなるので気に入り、週 2 回登ることもあった。早番で仕事が 16 時に終わり、直行して登り、18 時に自宅に戻れるので好都合だった。時間がある時は、ゆっくり花の観察をしても半日で充分で、午後は近くにある館山を歩いた。

　大作山の登り口は三か所あるが、いつも大駐車場に車を置き、南東登山口から登ることが多い。少し登ると二又に分かれるが、右側のコースを登り始めるとツリガネニンジン等の花々が咲く中をジグザグに登っていく。二頭のカモシカに会ったこともある。クルマユリが咲いていてホッとすると頂上が見えてくる。頂上の広場にある東屋で一息つく。ふと右手の木立を見ると、ダケカンバの木が何本か立っていて、その林床にはピンク色のシラネアオイの花が点々と数十本、広場にはタチツボスミレ、ギンラン等の花が一面に広がって咲いていて癒された。頂上は広く、東の方に移動するとコブシ、マンサク等の木立の間から、遠くに霊山の山々、手前には飯坂の町が広がっていて、素晴らしい展望だ。春には足元を見るとワラビが出ていて、その中にフデリンドウが沢山咲く。登山口は三か所あるが、頂上からの下り口は五か所あり、二本が途中で合流する。

シラネアオイ

一か所目の下り口は、直接、南東登山口に戻る。二か所目は大きなジグザグ道を下り始めると、右側の斜面にシラネアオイが植生している所がある。以前に、木々の間からピンク色の花が群生しているように見えたことがあり、今回、雑木が伐採された所で数本咲いていた。これからシラネアオイの花が増えることを願うばかりだ。シラネアオイが数本咲いたところからの下り道沿いにも点々と花が咲いていて楽しめる。急な石段を下り始めると足元に群生するエイザンスミレなどいろいろな花が咲き楽しめる。下って登山口に合流し、登山口に向かうと右側の道沿いにアカネスミレが群生し、右手の深い谷には白いヤマシャクヤクが咲いていた時があった。やがて南東登山口に出る。

シラネアオイ（白花）

　頂上から三か所目の下り口は、左手北の方に向かうと雄大な蔵王連峰が望める。一望して大きなジグザグ道が続き登山口に着くと、駐車スペースがあり、道の下の方を見ると小さな沼がある。ヒマラヤスギ、ツバキ等の樹木スミレ、イカリソウ、ツチアケビの花が咲く。沼を一周して戻ると車道に出て南東登山口に至る。途中の右

手山側に大きな岩が切り立っていて、その岩の上部にピンク色の花が見えた。何の花か気になり、岩の脇の斜面を登ると一面にイワウチワの花が咲いていた。そこは私の秘密の花園になった。
頂上からの西コースは、正面から見ると裏手になるが、やはり、ゆるやかなジグザグ道を歩く。下りながら山手をふと見ると、所々にヒメサユリの花が咲いていた。6 月は楽しみでこのコースを下りたが、今ではヒメサユリは消えてしまった。冬は友人とスノーシューで歩き、後に山スキーの練習をしたこともあった。西登山口に出て砂利道を歩いて南東登山口に戻るが、頂上から直接、西登山口に戻るコースもある。2年前になるが、この車道の右側が一段低くなっており、斜面に大量の太陽光パネルが設置されていて驚いた。設置工事をしている間は、大駐車場まで行く道路が狭く、大型トラックの往来で完成するまで登山口に行くことができなかった。

大駐車場から東の方にヒメサユリの丘があり、以前はヒメサユリが群生し、色々な花々が咲き乱れていたが、大きな雑木がうっそうとしていて、現在は何も咲いていない。花が咲くことを願うばかりだ。本当にヒメサユリに会いたい。

富士と私

長岡義人

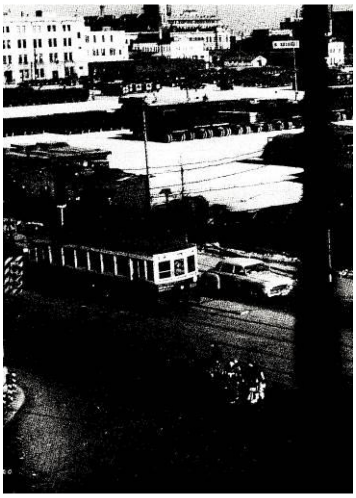
山中湖からの富士

突然だが母が六十一歳で逝ってもう四十年以上が過ぎた。看護婦（士）だった母は花や植木が大好きで、そんな理由からか勤務していた岡山の病院を退職して、何故か満州の農事試験場の職員となった。そしてそこで難病を患いその闘病中に日本の敗戦を迎えることとなる。そこからは娘の看病のため渡満していた母親（私の祖母）とふたり、ソ連兵に追われながら苦難の逃避行。病気を抱え死線を彷徨いながら、満州から朝鮮半島を歩き無蓋貨車に揺られて縦断し、母娘はやっとの思いで日本に引き揚げてきたそうだ。戦争中の話はあまりしたがらなかった母だったが、晩年自分の経験をなんとか書き残しておきたいという思いが募ってきたようだった。家族には内緒で北鮮避難民という体験記を新聞に投稿して掲載されたり、その他地方新聞に何篇かの戦中戦後の体験記が掲載されたりしていた。その中のひとつに「富士と私」という随筆があった。

富士と私（抄） F・N
私が横浜で結婚して住居を構えたのは昭和二十四年。戦災で焼け野原となった横浜には空地が多く、春には甘い香りを放つ菜の花が咲き、ネギ坊主の畑も広がっていた。我家の裏山にはウグイスもよく来て鳴いていた。やや高台にあった鄙びた町の風情は、田舎者の私の心を慰めてくれたものだった。
あれから二十年、空地には次々と新しい家が建ち、静かだった道は舗装され四六時中車が走り、騒音と共に我家は揺れた。私はそんな町の生活にひどく疲れてしまっていた。三年前だったか、我家の裏にある家族が裏山と呼んでいる小高い丘に、自然に飢えていた自分の心を癒すため、小さな野菜畑を作った。ここからは青空の中に、遠くの山々がパノラマのように広がって見えた。

それは開墾して間もない晩秋の、よく晴れた寒い朝のことだった。向いの丘に立つ地元で南京墓と呼ばれている、中国廟の赤く塗られた六角形の霊廟の桜林の上に、目にも鮮やかな朝日を浴びて、桜貝色に照り輝く富士を発見した。そしてその時二十年前の悲しい思い出が昨日のことのように心に浮かんできた。
それは昭和二十五年の初冬のこと。当時日本人はみんながまずしかった。兵隊帰りと引揚げ者の新世帯の私たちも酷い貧乏暮らしで、甘藷や菜っ葉の雑炊や、すいとんしか食べていない私には、生まれたばかりの長男に、母乳を与えることができなかったし、配給の粉乳はわずかで、その上薄灰色のザラザラと石灰のような脱脂乳にわが子は空腹を訴えてよく泣いた。闇ミルクの購入で夫の給料の半分は消えていった。医師の処方よりはるかに増量して与えたのだが、生後四ヵ月にはいると夜泣きが始まり、夜十時最後のミルクを飲ませてから四時間後の午前二時になると、決まって目覚まし時計のよう泣き出した。火のついたように泣くわが子を、夫の睡眠を妨げないようにソッと背負って庭に出る。晩秋の夜は冷える。どこかで鳴く犬の遠吠えが聞こえ、焼けトタンの家々を静かに月明かりが包む。私は星空を見つめて泣きながら子守歌を歌った。こんな時世に生まれたわが子が哀れでならなかった。戦争で失った着物の一枚でも残っていたなら、戦争がうらめしかった。

そんな時ユニセフの粉乳が月二ポンドずつ配給されることになり、配給日のよく晴れた日の午後、私はわが子を背負い市電に乗って保健所へ向かった。電車が運河に架かる橋にさしかかった時、橋上から見えた街並みに建ち並ぶ、ジュラルミンの進駐軍のカマボコ兵舎の向こうに、午後の陽に照らされて輝く雄大な富士山が見えた。「アッ、富士だわ」その富士山は、生活に疲れた私の目に何と神々しく美しく映ったことだろう。感動で胸一杯の私は途中下車して野毛山の坂を上り、頂上の石の上に背の子を降ろして、遠くに見える富士と向かい合った。「あの山が富士山よ」と指をさし頑是(がんぜ)無いわが子に囁いた。



戦後の横浜(市電)

ここ数年の激しい運命の流れは、満州での敗戦、北朝鮮避難民、引き揚げ、療養、結婚、出産とめまぐるしく変わった。

野毛山公園は恐ろしいほどの静けさであった。遠くの富士山に向かって私は大声で叫んだ。

「この子にたくさんミルクをください」

「‥‥‥‥」富士は無言だった。

「餓死する時はお前と一緒ね」

しばらくして富士は答えた。

「時の流れを待ちなさい」

「今すぐ、ほしいの」

「私たち母子が死ぬとき横浜の何割かの人も死ぬんだわ」冷たい野毛山山頂の風が私と子供のほおを強く打った。

初冬の弱い陽光は今日の糧を求めて思い悩む母子の住む町々を照らし、遠く丹沢、富士、その他薄紫色に霞む山々を輝き満たしている。

荘厳な富士は言った。

「お前はこの子の母ではないか」

「そうだ、私は母なんだ」生命に替えてもこの児を守り育てなければと、顔をあげて再び子を背にして丘を下った。振り返り見る富士はやさしく暖かくいつまでも私たち親子の後ろ姿をみつめてくれていた。

あれから二十年、私は三児の母となり、懸命に働きつづけて空をながめる心のゆとりもなく、あくせくと過ぎ去った歳月だった。豊というにはほど遠いけれど、食事にこと欠くこともなく、ささやかな幸福が私を包む。あの夜泣きの子も大学生となり、社会人となる日もそう遠くはない。

私は朝夕富士を見に裏山の畑にゆくのだが、この美しい山の見える日は年々少なくなった。

朝日を浴びてピンク色に輝く赤富士は清純な乙女のよう。昼の富士山は冷然として近寄り難い武将の山。そして夕富士は幽玄神秘で一番美しい。夕富士の見える日は西南の空高く宵の明星がきらきらと宝石のように輝く。

激動する日本の運命と共にゆれ動いた私の半生、残り少ない我が生涯に、この美しい夕富士をながめるのはあと何回であろうかと、富士に向かっていつまでも裏山にたたずんでいた。

(昭和四十七年 K 新聞「日曜文芸」掲載・要約)

母の背なの赤ん坊だった私は、六十一歳で死んだ母の年齢をいつの間にやら大きく越してしまった・・・

ブラジル紀行３

佐藤　守

5　ピッコ・デ・ポン・デ・アスーカル(Pico de Pão de Açúcar)登山(リオデジャネイロ州・パラチー市)

ブラジルでポン・デ・アスーカルというとリオデジャネイロ南部にある岩山が有名ですが、リオデジャネイロ州パラチー市に同名の岩山があります。リオデジャネイロ市のポン・デ・アスーカルは標高 396m ですが、パラチー市のポン・デ・アスーカルの標高は 425 m から 466 m まで様々の表記があります(環境省表示では 450 m とされています)。ロープウエーは無く登山道が整備されています。こちらは区別するため Pico de(尖ったもの)を付けて呼ばれています。なお、キリスト像で有名なのはモウ・ホド・コルコバードです。3 つとも似たような岩山です。

クルゼイロ浜とポン・デ・アスーカル

ピッコ・デ・ポン・デ・アスーカルの位置

ピコ・デ・ポン・デ・アスーカルは世界で唯一の熱帯フィヨルドとして知られるサコ・ド・ママングア地域にあります。一帯はフアチンガ州立生態保護区になっており、先住民族やカイサラ族のコミュニティが保護されています。

登山口はパラチーミリ地区の海岸から船で岬を回って裏側の半島のクルゼイロ浜にあります。地元漁師の船をチャーターして登山口へ。登山口の傍らにはピンクのブーゲンビリア。実はリオデジャネイロが原生地です。海岸沿いのヤシの木にはブロメリアが着生。ピンクの苞と紫の花弁が目を引きます。チランジア・ストリクタの仲間のようです。ブロメリアはパイナップル科の植物の総称です。岩や樹上に着生するものから地上部に生育するものまで多種多様。ブラジルの亜熱帯雨林には多くのブロメリアが自生しており、ランと並んでマタ・アトランティカを代表する花です。一度しか花を咲かせない一回結実性植物です。株が枯れる前に子株が芽生えます。

ブロメリア チランジア・ストリクタ

砂浜から山頂までは距離 1.5km、登高差 425m、登山道は尾根までほぼ直登ルートで久しぶりの本格的な登山でした。パートナーの兄弟や姪家族達と総勢8名で出発。海抜 0mから急登が続きます。標高が上がるにつれて周辺の樹木の密度が高まり、巨木も多く現れました。樹間は木性シダのヘゴ類が埋め、林床は大型のシダ類に覆われています。幹は色とりどりの地衣類が着生し、日本の樹木よりもあでやかです。

亜熱帯林の登山道

後半になると、林相が変わり、ササ類が目立ってきます。そして大岩の上にはブロメリア・インコアナナスが群生。赤と黄色のコントラストが鮮やか。そして頭上からはツルのようなものがあちこちに垂れています。急登続きで最後の 10 分ほどはさすがに息が上がってきましたが、何とかしのいで山頂へ。山頂からは 360 度の展望です。特にもう一つのポン・デ・アスーカルともいうべき岩山が裏側に控えていて、ピラミダルな山容が一層、達成感を強めてくれました。

Cryptocaria moschatta
板状の根が発達

皆さんが到着するまで景観を楽しんでいると、2人の女性が話しかけてきました。出会ったほとんどの登山者が、男性は上半身裸、女性もビキニや軽装です。長靴（日本から持参しました）姿の老人が珍しかったのでしょう。拙い英語で、日本から来たことや山登りが好きなことを話すと記念撮影をしてくれました。下りは義妹と花などを撮影しながらゆっくり下山。最高の満足感に満たされて浜に出ました。

ブロメリア・インコアナナス

6 古都パラチー

パラチー市は、リオデジャネイロ州の最南西の都市で、「パラチー」はトゥピ語で「魚の川」という意味。ミナスジェライス州の金を海岸地方へ運ぶための道（Caminho do Ouro:黄金の道）として重要な役割を担っていました。ポルトガルに金を供給した港町だけに住民はポルトガル系と先住民が多い。植民地時代の美しい家屋が残る旧市街は 1966 年に歴史地区に指定され、町並みの保存のために車の交通規制がされています。300 年前の教会、石畳の道、窓枠の鮮やかな建物などが古の営みを伝えています。居住地の一般家屋は木造を基調とした当時からのポルトガル様式ですが、どことなく和風を感じさせます（次回に続く）。

山頂からサコ・ド・ママングア

パラチー市の民家と海岸山脈

吾妻・安達太良花紀行 98

佐藤　守

ハンゴンソウ（*Jacobaea cannabifolia* キク科ヤコバエア属）

吾妻・安達太良連峰のミズナラ林から亜高山針葉樹林帯の湿り気のある林縁や沢沿いに植生する大型の多年草。日本在来種。適応範囲が広く、里山の沢沿いから亜高山の湿地周辺に人の背丈以上の群落を形成する。高山の植生調査に 20 年余り集中した時期があった。晩夏の頃に黄色いハンゴンソウの花を見て秋を感じていた。和名は、深く切れた葉の裂片が幽霊の手のように下に垂れ下がることから、魂を呼び戻す「反魂」と名づけられたとする説や強い香りが死者を蘇らすとの説がある。吾妻・安達太良山系では夏の終わりを告げる代表的な植物。

葉は互生。根生葉と茎葉がある。茎葉は互生して1から3対羽状に大きく切れ込む。裂片は1～7片。先端は3本のフォーク状になる。葉縁は波型の鋸歯がある。根生葉と下部の葉は開花期には枯れる。

花は頂性。直立した茎の先端に頭花を着けた大型の散形花序を形成する。頭花は周辺に 5～7 個の舌状花、その内側に多くの管状花を着ける。舌状花は明るい黄色、先端はタンポポのような明確な切れ込みは見られない。舌状花の冠毛は褐色を帯び、管状花と雌しべは橙色を帯びる。柱頭は 2 裂し、反転する。

名前が似ている大型の花にオオハンゴンソウがある。こちらは北米原産の環境省指定特定外来生物。許可なく栽培・保管・運搬・輸入・譲渡を行うことは禁止されている。明治中期に観賞用として導入された。1955 年までに野生化した。地下茎や埋土種子（土壌シードバンク）で繁殖するため焼却処分が必要である。かつて北海道を舞台にしたテレビドラマで一面黄色のオオハンゴンソウ群生地とともに百万本のバラを模したストーリが紹介された。その影響でもないだろうが、その場面をほうふつとする群生地を高山山麓で目にする。

ナギナタコウジュ（*Elsholtzia ciliataibes* シソ科ナギナタコウジュ属）

吾妻・安達太良連峰の山麓の乾燥した林縁に植生する一年草。和名は、花穂の姿をなぎなたに見立てたことと強い香りに由来する。コウジュ（香薷）は中国原産のイヌコウジュ属の一種を乾燥した漢方薬を指す。ナギナタコウジュも同様の薬効があることから、古来より、漢方薬として利用されてきた。薬効成分は 3 種類のモノテルペンが主成分。道路沿い日当たりの良いところによく群落を形成しているが、これは人がこぼれた種子を運んでいるためである。

葉は対生。茎は四角形で稜があり、葉とともに白い軟毛を有する。葉の形は長卵形で先は尖る。葉縁は丸い鋸歯がある。葉の基部は葉柄に流れる。葉柄は下部ほど長い。葉の裏面に腺点がある。

花は頂性。直立した茎の先端に穂状花序を形成する。花冠は花序の片側に偏って着生し、その反対側に苞が並ぶ。1つの苞に 5 個の花がつく。花冠は唇形で花冠の先は細かく裂け、毛羽立つ。花冠の色は品のある薄紫。雄しべは 4 個、花冠の外に突き出る。花糸は紫、葯は黄色である。雌しべは 1 個で、子房は 4 心室に分かれ果実が 4 個できる。花は下から上に咲きあがる。また、ナギナタコウジュは標高の高いところが先に咲き、低いところの開花が遅れる。このような開花特性はツリフネソウ、ボタンヅル、ヤクシソウなど秋に花を咲かせる植物に多い。また、片側に花を着ける植物にシモバシラがあるが吾妻・安達太良山域には植生しない。

秋になると吾妻・安達太良山域ではめっきり花が少なくなる。そんな中、観察会の下見で出かけた山麓の登山道で紫色の穂を垂れたナギナタコウジュの群落に出会った。それまでのイメージを覆すその花の美しさが今でも忘れられない。

第195回自然観察会 高松山・峨嵝山　陽だまり里山観察会

日時：2024年11月24日（日）8：00〜16：00

集合場所　小鳥の森駐車場　総会会場　東部学習センター

集合時間　8:00　参加定員　20名(総会は定員なし)

内容 福島市東部の里山、高松山と峨嵝山の残り少ない自然を探索します。4年ぶりの芋煮の後、総会です。

準備するもの　昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、帽子、手袋(軍手)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、ごみ袋、食器。

＊装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代(500円)、申し込み:11月22日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時〜9時でお願いします)。

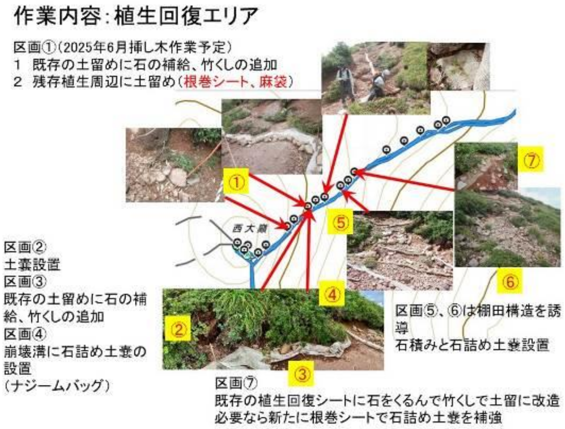
西大巓登山道整備作業(主催:環境省　共催:高山の原生林を守る会)

(環境省国立公園満喫プロジェクト:SUP2025)

実施日:9月23日(月・祝日)

集合場所・時間:グランデコスキー場駐車場　7:00(予定)

作業区間:西大巓山頂直下斜面崩壊地帯



西吾妻登山道誘導ロープ取下げ作業(詳細は佐藤守まで)

1. 実施日:10月19日(土)6:30〜17:00(雨天時10月20日に順延)
2. 定員 10名程度(一般公募含む)
3. 内容　グランデコスキー場ゴンドラ終点から西大巓に登り、西大巓山頂から西吾妻小屋までのロープ取り外し作業を行います。ゴンドラ代は全額会からの支援とします。
4. 集合場所・時間:四季の里正面入り口駐車場 6:45 現地(グランデコスキー場駐車場)7:45
5. 申し込み:10月17日(木)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話また はメール(全員返信モード)にてお願いします。(電話申込は午後7時〜9時でお願いします)

ボランティア作業に係るロープウエイ・リフト代を支援していただける方を求めています。ご協力いただける方は下記に振込をお願いします(通信欄に「ボランティア資金」と記載をお願いします)
郵便振替:02170−0−24351「高山の原生林を守る会」へ

振込による会費の納入は、郵便振替０２１７０−０−２４３５１「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報　第130号　2024年9月発行
編集・発行 : 高山の原生林を守る会　HP:http://adumatakayama.justhpbs.jp/index.htm
(URLが変わりました)
代表連絡先 : 佐藤　守　Phone　024−593−0188(夜間7時〜9時)
郵便振替 : 02170−0−24351 「高山の原生林を守る会」
入会方法 : 年会費(1000円)を添えて上記まで
編　集 :佐藤・奥田